

# 女の会通信

No. 5  
80.5.20

長崎・行動を起した女の会 事務局長(中略)の報告  
長崎市中園町四の十七 (中略)の報告

## 例会報告一

5月10日、例会を行いました。

女の会のこれまでの討論のまとめという意味で、テーマを四つにしぼり、まとめていく予定です。その一回目という二つで行ないました。

### テーマ「女の解放と性の解放」

発会当時の討論をふりがりながら、今、私たちはどう考えるのか、多くの意見が出ました。その中で、女性たちとしての性をめぐる諸問題へ男とのかかわり、生殖、避妊性観、その他にも、社会的諸関係としてみていくことがある程度でまたようです。討論のまとめは、後日、四つのテーマを終えたところまで文章化する予定です。

次回は、5月24日(土)に開催します。

### テーマ「女と男について」

深夜に及ぶ場合は宿泊できます。万障くりあわせ御出席下さい。

## 「長崎県・婦人のつどい」報告

四月二十四日(木)十二時半より四時まで行なわれまし

た。来賓として奥知事も出席され、婦人の社会参加を大いに進めていく旨の挨拶を讀み上げられました。しかし、公病室をすらすら、この会に出席するに身体設備までひともめあつたという発言、四十一年近く公務員をしてきたが今年初めて知った、多くの女が参加できるような努力はなされたのか、という発言、また会場に母子扶の姿はほとんどなく、やはり限られた少数の女に開かれた場ではなかったであろうか。

シンポジウムは、まず四人の女から提言、それに対して会場からの質問、最後に再び四人の女が話されるという形だった。時間足りないこともあって、話が充分にかみあわぬままに終わった。

この日の議論は長崎県、短大で長崎女大の女性地位・差別の問題をめぐり、進歩、制度的には現在ほとんど問題はない、もし不平を感じているならば具体的な問題で

ふだんの努力が結果。教育（家庭、学校、社会）に鍵。主婦・放送セミナー事務局長藤田氏——主婦の生活者、主婦

自身が生涯教育という展望の下に常に成長する人間であつてほしい。長崎大学商業短大教授・婦人少年室顧問市川氏

——女性に関する問題は、本音と建前がなせ二つも違つたろうか？。女性の職業観の問題はないか？。NBC勤務

（副参事）宮本圭子氏——具体的に①の仕事の質を高める（職域拡大・管理職）②自立は夫に（男性は生活上の自立を

③働く女も地域に帰り地域との接点を④文化としてのマスコットを創造する⑤平和を求める——以上でした。

東田はほとんど北島氏に集中し、本音はどうなのか、こつこつ愛情をどう思うか、に打寄つた。問題は向なのか、

具体的に何をするか、すべてこれからの問題だと感じた。

### 「主婦のオマジ」がくはる

・六月十一日より二週間

・セントラル劇場（万屋町）

見てみませんか

働く婦人の長崎県委員会に参加して 一青木——

四月二十七日、10時から午崎まで働く婦人の長崎県委員会

長崎下口、7集会が桜町長崎県勤労福祉会館で開催されました。午前中は五つの分科会（権利の問題、婦人部の組織強化、未婚者女性の問題、保育問題、女子教育の問題）で討論が行なわれました。

今年の特徴は、又る振りに分科会を式で行なわれたこと、女子教育の問題が新設されたことでした。

労女組合の役員をしている時は、それなりに考えて各分科会に入っていました。フリーの立場で参加した私は、

何ら考慮することなく才分科会の子教育の問題に入り

ました。若干遅れて討論に加わつたので明確ではありませんが、八割が女教師で、あと、全専通、労生員、労金、全

日自分、自治労などで、ある程度民主的に運営されていると思われる職場の女達はかりと、労基法や男女差別が野放

しの民間、特に中小企業に勤務している女が参加していません。これは、非常に残念でなりません。

まず司会者が、中受放を行なつた男女平等に関する意識調査が紹介されました。一年男女、三年男女と同じアンケート

調査が紹介されました。一年男女、三年男女と同じアンケート

トもって、います。進学率が進むに従って男女差別意識が  
 高くなっていきます。例えば男らしく・女らしくについては  
 三年になると大身であることが多くなる。進学は、男子は  
 4年生大学が3年になると半教以上になるが女子は拡大ま  
 でが殆んどであり、エ板ぎにつけては3年になると否定的と  
 なり父親の家事労働についてはおかしいと感じるが非常に  
 多く男女の能力差では男がすぐれているが3年女子は一年  
 に比べ2倍になり女子がすぐれているほどなる。男女の  
 賃金は同一が前提とするのが3年女子は増え多分が男子に  
 一年は当然でなすが断然多い。このように中學生を既に男  
 女役割意識が根づいていることを物語っていると感じました。  
 又、取場の男女差別の実態の報告がありました。教師  
 が圧倒的多数だ。たので教師の問題が多くなってきました。  
 学校では同一労働同一賃金で、たに教組です。ので他の職種  
 より男女差別が少いのは事実だし、意識しないのと差別を差  
 別と感じないのではなにかと思いましたが、しかし主任手当  
 問題以後は手当支給の主任は男教師が多いなど手当にから  
 んで差別が拡大して来るように感じました。中学校の男女共  
 修問題(家庭科)には共鳴する人があり、当日配布された

奥婦人対策室から送られた「長崎県の婦人対策」の中にも  
 もらっていました。最後に討論が自熱したのに取場のお茶  
 汲み問題がみりました。

かんざり又 特作

紙の中のエレン

H・Y

仕事とやめて五年たつた。やめた時のあのほつとした気  
 持ちは解放感とあ、今から好きな事がはじのられるとい  
 ううれしくて。大きいおなをかかえて、毎週いろんな教室  
 に通った。そしてその年の九月、第一子出産。かんじがら  
 の生活がはじまった。家事はいつでもできる。時間の使  
 い方がいつの間にかルーズになってきた。こんなはずでは  
 なかったという気持ち。こんな生活なんとかしなくちゃと  
 いうあせり。「婦人の友」の愛読者の団体(友の会・羽仁

もと子創立にも入会してみた。家事プロのゼミ団体ではないが家事プロのような人がたくさんいた。家計簿は、ちり、手づくり服、手づくりおやつ、手づくりおもちや、朝は手づくりパンがでてくる家庭。一つ一つ感心するものばかり。私もつものあかでも飲んでみたい気持ちになり、少しづつまねしてみる。しかし、自分自身の努力不足もあってどうにもうまくいかない。熱心になれないのはどうしてだろう。三年後第二子出産。その子が今年五月、友の会にも手づれて出席している。五月の例会で次の問題が出された。現在の子は骨が折れやすい。食生活の問題が出される中で、ある会員の発言があった。「私の近所に共働きの人があります。朝はパンとヨーヒー。なんにも食べない時もあるそうです。子供も、私は女性の社会的進歩には反対ではありません。しかしこうゆう現実が住々にしてあるのではございませんか。そしてその彼女は学校では給食指導の係にどうです。」この一言で会員の皆はドンと笑った。私も笑った。しかし後でいやな気持ちが残ってしまった。おゆき・朝はなんにも食べない日もあったらう。私もどうだ、た目もみ、た目もみ。

現在家庭にいる自分、友の会にも微しされたり自分にだんたんいらだってきた。私の中のエレンが頭をもうあげて来たのだろうか？ そんなある日、新聞に目をやると、病院内保母の募集。迷ったあげく履歴書を書き面接へ。二ちらの状況も実に甘い。自分の子供もその保育所に連れて来てほしい。面接者白く「独身の方もたくさん応募なさっていますからね。」そうた、ゆくとりう事はもつときびしいものなのだ。この五年間で、私もずいぶん甘くなってしまうものだ。

私が五十になった時、時々勤務したいんですけれどやとつて下さい、というかもしれない。

女ならやってみなは、今かもしれない。

。。。お・し・ら・せ。。。……………

「女ならやってみなは」感想文集を 作ります。

会員ならびに通信読者の方で、映画をみられた方は是非感想文を提出して下さい。

。。。お・ね・が・い……………

映画をみて……

I.C.

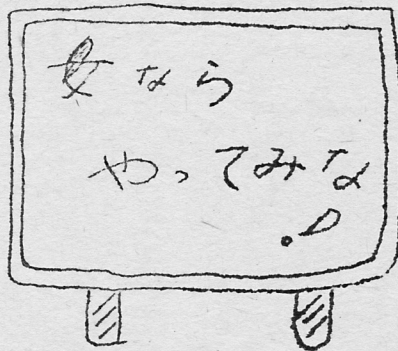
あの頃は五月だというのに寒く使っていた。映画を観終、  
たばかりの丸は薄暗いバスの中で、エレンのあのやさしい  
微笑を思い浮かべていたのです。公園のベンチで暮をまき  
ながら微笑んでいるエレンのあの美しい最後の映像を。ヤ  
さしさに溢れたあの微笑は、エレンのものであると同時に  
・この映画を創った方々のものでもあったのでしよう。(一)  
女ならやってみな」といふ。ちよつとおかしなこの題名の  
映画は、女性の解放を前面に強く押し出した作品だと思わ  
れますが、私には不しぎにも、女性が本来もっている細や  
かなやさしさが全編を被っていた気がしたのです。いやそ  
れはふしぎどころか、とても自然なことなのですが、中場  
の中の女性たち、彼女たちの顔は女であるとともに、やさ  
しい人間たちの顔であり、この作品を創り上げた人々の顔  
でもあり、またこの作品を受けとめた人々の顔でもあった  
のでしよう。あの市場にはなんと豊かな生命がみちみち  
ていたことか。でも一方、私はこんなことも考えたのです  
・女性が映画を創るとなぜ女性の問題提議ばかりか、しか  
も日常の生なましい表現手段で固定化されてしまうんだろ  
うか？ということをです。これは観客としては忍耐を強

はらねることになる場合が多いからです。映画というものは  
は日常から脱却した所から始まるものでは無いでしょうか  
・作品を創るといふことは、人間を写すをもひつくるためた  
広大の中で捉えながら、創作的な世界を形づくること、し  
かねない。危険性さえともな、た行為であると思ふのです  
・(男性が女性の世界を演じてみせるあの幻想シーンほと  
てもダイナミックでありましたが、)運動体としての映画  
もそれなりに意義があると思ひます。職業一つをとってみ  
ても女性が差別されてくる二の現実を考へてみるならば、  
この様な作品がつくられることは当然なことだと思ふので  
す。それでも私はなお、女性が本当に自分自身を解放して  
いるならば、シニールレアリズムの映像なども、女流だと  
いう誇大広告もせずにさりげなく創り上げてしまふのでは  
ないだろうか、と考へるのです。たぬれない作品といえ  
ば、フェリーニ監督の(サテリコン)とかポランスキー監  
督の(ローズマリーの赤ら顔)や(袋小路)、キネーブ  
リック監督の(時計じかけのオレンジ)などです。百作  
品ばかりですけど、仮にその様な映画を女性がさりげなく  
創ったとしたら、それこそ立ち上がったフラホーと叫ぶこ  
とでしよう。大切なことは、男であり女であるとともに他

の生きものたちとともに地球星の上で生きている人間であるという事です。社会とは考え方によっては物のようなものかもしれない。その抽象的な料の中でがんじがらめになっている男性の方が女性よりもっと不幸かもしれないのです。女性が男性を非難するのでもなく、男性が女性を非難するのでもなく、権力に胡床をかいてはいる人間たちについて叫ぶのが正当な道ではないでしょうか。真に自由を求めてはいるという意味では、男性も女性も同じなのですから。エレンはなぜ背をぬめ、あんなにも疲れた顔をして部屋を片付けていたのでしょうか。カメラはいろいろな物を映し出していました。ジニウタン・クツニョン・ウエギバチ……。私たちは物を持ち過ぎてはいませんか。すべてが必需品ばかりでしょうか。そのうち、日本の家屋はともかく、真合にふさぎていると思えます。私たちが好きなのです。ベッドもいらぬし、イスもいらぬし。いつでもゴロゴロと横になれるし、横になれるは空かともよく見えるのです。私にはノ森を過ぎたばかりの娘がいますが、週に一度、拭き掃除するだけ。あとは彼女が落としていくパンツをいろいろ歩いていくだけで結構きれいにくらせてい

います。そして人間は他の生きものたちに対してもっと謙虚になるべきだなとも思っています。彼等は必要のないだけを取り、必要な果づくりだけをして、生き死んでいきます。なのに人間はなんと余分なものを食べ、余分な物を持ち、余分な床があるのに車に閉じこもり、拳銃のはてにつかぬぎつた顔をしてはいることでしょうか。私たちがもっとも謙虚になつて鳥の生命一羽をもやさしく想像した時、人間同様にまた、他者に対する理解が生まれくるのではないかと思ふのです。運動体としての表現形式から解放された、女性の映画作家が次々とあらわれる日々を、私は期待しているのです。

映 画 板



「女ならやってみな」をみて

Y・H

この映画の家庭も、テンマークの一般的な家庭だろうと思いますが、主婦の仕事は、どこも同じで、単純な毎日の繰返して、それが子供達に手のかかる時は、自分の事を忘れて、すごしてしまい、子育てが終って、中絶の夫婦ふたりの生活では、全くウンザリする程、退屈な毎日であろうと推測するので、私も年代的に六十者になろうとしているので、よく理解できるつもりです。

エレンはむなしさ、いらだちを解消すべく、夫に相談をして、自分の友人も共っていた事に気づき、自分を取り戻すのに、医者にも相談するが、仲々理解してもらえそうもなく、職を求めて世の中に出てゆこうと決心する。然し、主婦の経験だけでは、エレンの望む仕事にはつけない事を知らず、職安のすすめもあったが、けなげにも事務の能力をつけるための、若い人にまじって勉強をする彼女のフットに感心した。年をとってくると、若い時と違って、理解力はあっても、記憶力が悪く、又根気がなくなるのを自身ひびく感じているので、ごきるだけ若い時、又子供に手があまりかからなくなってきた時点で、少しづつでも、

社会とのつながりを求めていった方が、よいのではないだろうかと思った。

逆転劇では、買物袋をアラさげて、夕食の買物を心配するサラリマンの妻をみて、いすこも同じ情景だと思つた。逆転しても、それはやはりお互いが疎外されているのに変わりないのだと強く感じました。

やっと職を得て、労働組合の問題に少しかわりを持ち解雇された時に、エレンが一つの明るい見通しをもって、受けとっていた。彼女の成長ぶりが感じられた。しかしこれから先がもつと社会人としての正念場だと思つた。

生活苦のない彼女の就職。生き甲斐を求めて暮すのにはもつと他にやる事があるのではないか、と思う。社会とのつながりを持って生活をするという事は、仲々急にはできないし、どこから自分の能力が引出せるかもわからないので、やはり少しずつ色んな事にぶつかってゆき、自分の人生を大切に生きようとするれば、そこで他人の人生も尊重できるようになるのではないかしらと思つた。

エレンと私とは、年齢も家族の状態も違うのに、あつ全く同じだ、あつよく似ている、と思つことが非常に多かつた。デンマークは、日本に比べて女の任みやすい国だと思つていたが、労働条件に男女の差が少ないこと一即女が生きやすい状況が生まれるわけではない、と思つた。法律や社会の仕組みを誰かが変えてくれるのを待つだけでは、自命たちの毎日の暮らしは変わらない。男が頑張り、女は内助の功では、現在の形が強まるばかり。まさに、「女ならやってみな！」

逆転シーンで、女自身が意識してやっていること、無意識にやっていることを生活の中で細かく描いてくれた。日頃、それぐらいは仕方がないとか、そんなもんだらうと思ひ込んでいる事が、映画の中で見せられると、客観的にはどんな事だったのか少しばかり見えてきた気がする。ほんのちよつとした事の積み重ねが、どれ程大きな結果を引き起こすものか。「女」が仕事(笑)から帰宅すると「男」は電話をあわてて切る。夜「男」は最新モードの下着をつけて「サ」のいるベットに誘われる。「女達」は「男」にもて

たくて化粧や会話術や心理をお互いに研究しあう、大臣になつた「男」はインタヴューで家族の理解を強調し家族への配慮をしていると述べる……現実の男と女はどうか？

現在の男と女の関係は、正常だとは絶対に思えない。男の役割がそれそれあるとか、お互いに思いやりをもち、とか、つまらないことに目くじらをとたないでとか、どうして言えるのだろうか。人間対人間としての対等の関係をつくる努力は、どれ位真剣にやっているとこのだろうか。

それにしても、理解する・理解してもらおうという言葉の重みがズシツときた。夢から覚めたエレンと夫との会話(一泣き叫びながら)、最後のシーンの公園での会話(にこやかに)、エレンはあれほど変わっていったのに、その姿をずっと見てきたはずの夫はちつとも変わっていない。自命と夫との姿がそれらのシーンにだぶって見えた。泣き叫ぶことを過ぎて、ホロリと涙が出てきてしまうことまではどうやら通り抜けてきたが、にこやかにとは程遠い。「私はそうは思わないわ」「私はそうはしないわ」とにこやかに断固として言えるようになるまで、どれ位かかるかな？